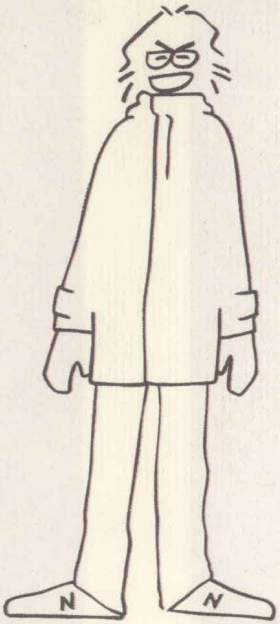
チューヤン日本旅日記

朋友チューヤン JAPAN TOUR

謝昭仁



日本テレビ

ユーヤン日本旅日記

朋友チューヤン JAPAN TOUR

謝昭仁

日本テレビ

チューヤン日本旅日記

著　者　謝 昭仁
訳　者　雷波少年
発行者　河本達二
初　版　1999年7月17日
発行所　日本テレビ放送網株式会社
〒102-8004
東京都千代田区二番町14
電話03-5275-1111（大代表）
印刷　廣済堂印刷株式会社

©NTV
©NTV 1999 Printed in Japan

ISBN 4-8203-9728-1 C0095

落丁・乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

Chiu-Yan Diary of Japan Tour

插絵・謝昭仁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ndex

まえがき …… 6
Chapter 1
旅、ふたたび　北海道～東京 …… 9
Chapter 2
おいどんは昭仁でごわす　鹿児島～東京 …… 49
Chapter 3
旅館住み込み加賀の旅　石川～東京 …… 73
Chapter 4
南国土佐の魚売り　高知～東京 …… 93
Chapter 5
冬は荒海、男は漁師　青森～東京 …… 109
Chapter 6
お祭り紀州　和歌山～東京 …… 125

Chapter 7
ラッコの言葉が話せたら　長崎〜東京 …… 143
Chapter 8
にわか酒杜氏　岐阜〜東京 …… 157
Chapter 9
食べろ、食べろ、北誉!!　鳥取〜東京 …… 171
Chapter 10
提灯工房弟子入り　秋田〜東京 …… 183
Chapter 11
空手道の老師と出会う　沖縄〜東京 …… 197
Epilogue …… 211

まえがき

それは不思議な気がする。

今夜、チューヤンは「後ろ楽しいガーデン」のトンネルの壁画のデザインを徹夜でしているらしい。

チューヤンと、香港のオーディションで、初めて会って、まもなく2年。

なぜ、こんな事になってしまったのだろう。

第一印象は決して良いものではなかった。

そして、ヒッチハイクの旅が始まっても、いつ〝ギブアップ〟と言うのか、正直、ハラハラする日々が続いた。

それがいつしか、前向きに旅をとらえ始め、そして、チューヤンのキャラクター、魅力が僕達に、大仰に言えば、日本人にゆっくりと浸み渡っていったような気がする。

親を思う心、パートナー伊藤を思いやる心、機転、日本人とは異なる感性……。

どんどんチューヤンに魅かれていく自分を感じた。

そして、スレットネス灯台にゴールをする直前、「チューヤンが見る日本はどんななんだろう?」という思いが湧いてきた。

こうして「チューヤンのジャパンツアー」は生まれました。
そして、この旅のシリーズが終わった今、チューヤンは、「ニホン、スキデス」と言ってくれています。
そして僕も「日本もまだまだ捨てたもんじゃないな」と感じています。
長びく不況の中で、日本をそんな風にとらえ直せたのは、何だかステキな気がします。

チューヤンは、「モウ旅ハイイデス」と言っていますが、本心ではない気がします。
ある日突然、姿を消す気がする。
なぜなら、彼は「永遠のトラベラー」だと思うから……。
それでは「チューヤン日本旅日記」、ゆっくりとお読み下さい。

「雷波少年」演出・プロデューサー　土屋敏男

この日記は、昭仁（チューヤン）が書き記した中国語原文を雷波少年が翻訳したものですが、昭仁がひらがなやカタカナなどで実際に日本語として書いたものについては、本文中、**ゴシック体**で印刷してあります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

Chapter 1

Today I meet A lot of NICE People, Very Lucky !!

旅、ふたたび

北海道→東京

1月2日　納沙布岬（のさっぷみさき）―釧路

昨夜、〝電波少年MC抜擢〟の大ニュースを聞かされた直後、プロデューサーの土屋さんにアイマスクとヘッドホンをさせられ、僕は〝暗黒の世界〟へと入った。でも、これにももう慣れっこだ。なすび、ロッコツマニア、高史[※1]の様子を見て、のんびりやっていられるほどMCは生やさしくはないとも思ったし……。

出発は早朝だった。

もちろん、どこへ行くのかなんて僕には知るよしもない。

何も見えないけれど、車で空港へ連れて行かれ、飛行機に乗せられたことだけはわかった。きっと遠いところへ行くに違いない。

飛行機をおり、最後は長いこと車でガタゴト揺られ、ようやく目的地に着いた。

ここはいったいどこなんだろう？　寒い……。

土屋さんは車からおりてもまだアイマスクをとらせてはくれなかった。そればかりか、土屋さんは僕の財布の中のお金と、明子が昨日の夜に僕にくれたお年玉の袋、そしてソックスに隠しておいたVISAカードまで取り上げてしまった。ああ、これでほんとうの一文無し

だ……。

土屋さんは、12日の午後8時までに自力で東京のＮＴＶまで戻って来るようにと、僕に言いわたした。二言三言以外、日本語のまったくわからない僕に、日本のどこなのかもわからないこの場所から、無一文で東京へ帰れというのだから、恐ろしくないわけがない。でも、さいわいなことに、この旅には時間制限がある。何日かだけをガンバって乗り越えればいいのだ。……でも、やっぱり不安……。

今回はＮ[※2]ＡＫＡやＩＩＪＩＭＡも面倒をみてくれない。自分でカメラを持って、自分で映すのだ。

１００を数えてから僕はアイマスクをとった。

僕は海辺の近くに立っていた。水平線を見るのは久しぶりだった。海の他は見渡す限りの黄色の草原で、とっても寂しいところだった。

さあ、出発だ。

小道に沿って歩きながら、僕は「ハッピーニューイヤー！」と大声で叫んだ。

やがてひとりのおばあさんに出会った。おばあさんは僕を家に入れてくれ、飲み物をごちそうしてくれた。

僕はここがどこなのかたずねてみた。おばあさんは、なんと読むのかわからないが、「根室市」と書いてくれた。一体どこなんだろう？　すると突然、ピンときた。ここは北海道に違いない！　こんなに寒いのは北海道だからだ！　おばあさんにきいてみるとほんとうに北海道だった！

大通りに出ると、警察官に会った。彼はＴＡＫＡＳＨＩという名前だった！　中川孝司！彼は僕を小さな町まで連れていってくれた。

道すがら、彼は北海道は「島」だと教えてくれた。東京へ行くには、途中にある海を渡らないといけない。僕もそのことは知っていたけれど、いざハッキリそう言われると、ちょっとの間、どうしていいのかわからない不安な気持ちに襲われた。

この小さな町は、駒場町というところだった。町のコンビニに行って知ったのだが、東京へ行くには必ず函館という港へ行かなければならないそうだ。

ひたすら前進することに決め、道へ出てヒッチハイクを始めた。

路上では僕を知っている人にずいぶん出会った。僕はとまどった。以前、ＮＡＫＡが「旅行をするときには純粋に旅行をするべきだ、テレビで僕たちを知っている人の助けを受けてはだめだ」と言っていたことがあった。その言葉が僕の頭の中にしっかり焼きついているの

だ。でも、今ではどこへ行っても誰もが僕を知っている。それなら、いったいどこに行けば、僕を知らない人に出会えるのか？

どう考えても考えがまとまらなかった。止まってくれる車はみな僕が昭仁と知って止まってくれるのだ。そうでなければヒッチハイクがこんなにうまくいくはずがない。

函館へ行く車に乗ったが、少し走っただけで、僕はなんだか申し訳ないことをしているような気がしておろしてもらった。

それからずいぶん歩いて、町はずれまで行き、大きな駐車場のトイレの中に入ると僕は自問自答した。

〝僕のことを知っている人の助けを借りてもいいのだろうか？〟

ずいぶん長いこと考えたが、答えは見つからなかった。僕はいったい、どうすればいいんだ？

今夜はここの車椅子用の大きなトイレで寝ることにした。

でも寒くて眠れず、しかもひどく疲れていた。

僕は自問自答を続けた。そしてついに心を決めた。テレビを見た人から助けを借りたっていいじゃないか。たとえば絵を描いてあげたり、アルバイトをしたり、手伝いをしたりで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo